

クロアチアにおける「二つの民族主義」について

磯村 尚弘

1.はじめに

クロアチア民族主義を考察する上で、1960年代から70年代初頭までの約10年間は重要な時期である。なぜなら、この時期に行われた経済改革への不満から、1971年に「クロアチアの春」と呼ばれる大規模な民族主義運動が起きたからである。この運動には、1991年の独立後初の大統領となったトゥジマンなど、独立後のクロアチア政界やクロアチア民族主義に重要な影響力をもった人物が多数参加した。

ユーゴスラヴィア政府（以下「連邦政府」と表記）は、1963年に改正された憲法をもとに1965年から経済改革を実施した。また1968年にはユーゴスラヴィア共産主義者同盟の規約が改正された。これによって各共和国・自治州における共産主義者同盟組織の権限が拡大し、行政の分権化が進められた。この経済改革や共産主義者同盟組織の改革以降も、連邦政府は各共和国の外貨管理制度の改正を行い、1950年の「労働者集団による国家経済企業と上級経済連合の管理に関する基本法」制定以降進められた、企業に対する労働者自主管理制度の改革に積極的に取り組んでいく。

しかしこうした諸々の経済改革は、クロアチア共和国ではユーゴスラヴィア内の共和国間の経済格差の拡大、特にセルビア共和国との格差が拡大し、クロアチアが観光等で得た利益がセルビアに搾取されると解釈され、政策への不満が高まった。そのためクロアチア共産主義者同盟指導部は、さらなる自治権の拡大と経済の不均衡の是正を模索し、連邦政府への要求を強めた。そして同時期に、それまで抑えられていたクロアチア民族主義運動が、連邦政府への不満を背景として高揚し始め、「クロアチアの春」と呼ばれる民族主義運動が起こるのである。

ところで、この時期にクロアチアにおいて影響力を持った団体は、クロアチア共産主義者同盟以外に少なくとも3つ存在した。それは、カトリック教会、

マティツァ・フルヴァツカ (Matica Hrvatska) としてマルクス主義「プラクシス」学派である¹。特にカトリック教会とマティツァ・フルヴァツカは、クロアチア民族主義の発展に重要な役割を演じた組織であった。しかし、この二つの組織は、それぞれ異なる視点からクロアチア民族主義運動を展開した。即ち、カトリック教会は、カトリックの教義や信仰の文脈のなかで、とくに「マリア崇敬」という、聖母マリアに対する信仰の中にクロアチア民族主義を融合させることで、民族主義運動を展開していたのに対し、マティツァ・フルヴァツカは、「クロアチア語」を基盤としたクロアチア民族主義のもとで、クロアチア語文法の整備、語彙の拡充、クロアチア語での文学作品の出版活動を行っていくことで民族運動を展開した。両者の関係は、クロアチアで民族主義運動がおこった19世紀中頃以降、時代によって変化しているが、そのなかで、両者の展開する民族主義運動の違いが鮮明に現れたのが、「クロアチアの春」に対する活動であった。つまり、マティツァ・フルヴァツカは「クロアチアの春」ではこの運動に積極的に関わり、運動の中心的な役割を果たしたのに対し、カトリック教会は、司教団がこの運動に関与せず、教会組織としてはこの運動から距離をとった一方で、一部の聖職者がマティツァ・フルヴァツカとともに熱心にこの運動に参加したのである。

ところで、クロアチアにおいてクロアチア民族主義を考察するさい、どちらか一方の民族主義運動のみとりあげて考察するのが一般的である。例えばマトコヴィチは、「クロアチアの春」の時期に高揚した民族運動について、マティツァ・フルヴァツカの活動のみ取り上げて論じているし (Matković 2003)、チュバロはクロアチア文化やクロアチア民族主義の発展におけるカトリック教会の役割は大きかったことを認めつつ、教会が主体となって、民族主義運動にはほとんど関与してこなかったと述べ、過小評価している (Cuvalo 1990: 155)。しかし教会は民族主義運動に関与していなかったのではなく、民族主義的な要素を多く含んだ独自の運動を展開していたのであり、これもクロアチア民族主義の重要な要素である。そのためクロアチア民族主義の全体像を捉えるためには、両者の掲げる民族主義の特徴を明確にすることが不可欠であると思われる。

そこで本稿では、両者の掲げる民族主義の違いが明確に現れた「クロアチアの春」という事件を中心にして、両者の活動の違いを比較することで、クロアチアには「二つの民族主義」が存在することを論じたい。

2. 「クroatiaの春」の背景：経済改革と民族問題

「クroatiaの春」にいたる過程を考察するにあたって、連邦政府の経済政策と民族政策に言及しておく必要がある。先ほど述べたように、この事件の背景には経済政策に対する不満があり、また政府の民族問題への対応は共産主義体制の根幹に大きく関わっていたからである。

2 - 1. 経済改革

1963年に改正された憲法をもとに1965年に行われた経済改革は、行政の経済・金融部門への介入やその指導的役割を減らし、企業の自立性を高めて市場経済への移行を目的としたものであった。このためこの時期のユーゴスラヴィアにおける社会主義は「市場社会主義」と呼ばれた。例えばルシノウはこの時期のユーゴスラヴィアにおける社会主義を政府の介入を減らし、企業の自立性を高めた政策内容から「レッセ・フェール社会主義」と呼んでいる（Rusinow 1975: 138）。

ただ、この改革はセルビア共和国への経済の一極集中をさらに進行させた。例えば、それまで企業への投資活動を行っていた「社会的投資ファンド」のうち、連邦レベルでの投資活動を行っていた「一般的投資ファンド」が廃止され、一般的投資ファンドが所有していた資産が、ユーゴスラヴィア投資銀行、農業銀行、貿易銀行に移管されたが、この3つの銀行はベオグラードにあった（Rusinow 1975: 174）。ちなみにこの一般的投資ファンドが保有していた資産は、社会的投資ファンド全資産の66.8%を占めていた。また、ユーゴスラヴィアの大銀行の上位10社のうち、3位までの銀行と第6位がベオグラードにある銀行であり、セルビア共和国内にある他の銀行と合わせると、これらの銀行の総資産はユーゴスラヴィア全銀行の総資産の63パーセントを占めていた。また、貿易会社も上位10社のうち4社がベオグラードにある会社であり、それらを合計すると、当時年間235億ディナールの取引高があり、ユーゴスラヴィアの貿易総額の70%を扱っていた（小山 1996: 12）。

連邦予算の配分でも、例えばチュバロは、1963年に発表されたユーゴスラヴィア国立銀行の統計資料を引用しつつ、クroatia共和国の予算分担率は31.11パーセントであるのに対し、連邦政府からの予算配分率は18.89パーセントであり、一方セルビア共和国の予算分担率は29.17パーセントであるのに対し、予算配分率は68.13パーセントにのぼる、と述べている（Cuvalo 1990: 84）。

ベオグラードの経済力が強まったという事実は、セルビア共和国の外部ではセルビアの経済力の強化とみなされた。政治においても 1968 年から共産主義者同盟組織や行政の分権化が進められたが、それでも政治の中心は依然として連邦政府の首都であるベオグラードにあったため、他民族からはセルビアに政治権力や経済が集中する中央集権制と理解され、脅威として受け取られたのである。

2 - 2. 民族問題

ユーゴスラヴィアは国内に多くの民族をかかえる国家であり、第二次大戦中は各民族間で戦闘や虐殺がおきたため、民族問題は建国当初から重要な問題であった²。共産主義者同盟指導部は「友愛と団結」というスローガンをかけて民族問題の克服を図ったが、どのような思想を基盤として「友愛」を育み「団結」するので指導者の間で微妙な差異がみられた。なぜならユーゴスラヴィアには、民族問題の克服を訴える主張の根拠となる思想が二つ存在したからである。それは共産主義イデオロギーと「ユーゴスラヴィズム（南スラブ思想）」であった³。共産主義国家であったので、ユーゴスラヴィズムのみ選択して主張するということはなかったが、どちらに重心を置くかで差異が生じたのである。

例えばチトーは、中央集権的な性格を帯びていたユーゴスラヴィア王国時代のユーゴスラヴィズムを批判しながらも、南スラブ諸民族の政治的連帯の重要な根拠となる、このユーゴスラヴィズムという概念をなくすことをためらっていたという（Jović 2003: 162）。一方チトーの側近であったカルデリは、ユーゴスラヴィズムという概念は放棄し、共産主義イデオロギーのもとで、民族間の経済的な不均衡を是正するなどしてこの問題を克服していくことが重要であると考えた。彼はユーゴスラヴィア王国を例に出して、ユーゴスラヴィズムの下でセルビア人に権力が集中し、政治的不平等をまねいた状況から、ユーゴスラヴィズムは民族間の平等を実現できない概念であると考えた（Kardelj 1986: 9）。また彼は『民族と国際関係の理論』において、「新生ユーゴスラヴィアにおいては、抑圧されている人民の問題、および覇権的な人民抑圧の問題としての民族問題は、原則的には解決された」（Kardelj 1986: 30）としながらも、各民族によって経済発展の水準が著しく異なっており、ここから不均衡と対立が生じていることを認めている（同 34）。そして低開発地域への継続的な援助によって生産力を発展させることで、経済的不平等からくる政治的影響、つま

り、狭隘な民族主義の伸張を防げると主張している（同 35-37）。

しかし開発援助が低開発地域、特にセルビア、モンテネグロ、マケドニアといった地域に偏ったことで、経済先進地域であったクroatia、スロヴェニアの開発が後回しになり、両国の不満は拡大した。加藤によれば、投資効果を無視した「政治工場」の例として、モンテネグロのニクシッチに政治的な誘導によって製鉄所が建設されたものの、製品を輸送する手段が無かったためにそれを輸送する鉄道や道路をさらに10年かけて建設した、という（加藤 1979: 38）。

ところでこの問題について、マトコヴィチは、連邦政府が、マルクス主義イデオロギーに基づいたユーゴスラヴィズムを導入する事でクroatia民族文化を消滅させようとしたこと、そしてそれはユーゴスラヴィズムとはいえ、セルビア的規範に基づくものであり、セルビア文化への統合を意味したと述べている（Matković 2003: 354）。共産主義イデオロギーとユーゴスラヴィズム、そして覇権的セルビア民族主義を混同してそのような解釈にいたったものと思われるが、そのような解釈が生じるのも無理はないと思われる。なぜなら前述したような経済的な不平等感の拡大に加え、文化、特に言語の面でクroatia人の不満がくすぶっていたからである。

1954年12月8日から10日にかけて、セルビアとクroatiaの言語学者による協議がセルビア共和国のノヴィサドで行われ、その結果各言語学者の代表によって、「ノヴィサド協定」が締結された。その協定で、セルビア人、クroatia人、モンテネグロ人は一つの言語を共有し、その言語は二つの同等な権利をもつ変異体、つまりザグレブを中心とする地域で使用されている変異体（西部変異体）とベオグラードを中心とする地域で使用されている変異体（東部変異体）からなること、この「統一言語」の名称はその二つの構成要素からだされた名称を必ず含まねばならないこと、つまり「セルビア」「クroatia」という名称を必ず含まねばならないこと、そしてセルビアで使用されるキリル文字とクroatiaで使用されるラテン文字は同等の権利を持つこと、などが決められた（Greenberg 2004: 172-173）。これによって統一言語の名称は、東部変異体については「セルビアクroatia語（srpskohrvatski）」とされ、西部変異体については「クroatiaセルビア語（hrvatskosrpski）」とされた。またこの合意をもとに1960年にはザグレブとノヴィサドで公式の正書法が発表され、正書法のマニュアルが、ザグレブでは西部変異体のラテン文字で出版され、ノヴィサドでは東部変異体のキリル文字で出版された。辞書も変異体によって異なる2種類の

辞書の作成が行われ、1967年に第1巻がそれぞれ出版された。

しかし、このような努力が行われても、東部変異体、つまりセルビアで使用されている言語の優越性は揺るがなかった。連邦政府の中枢機関がベオグラードに集中しているうえ、軍隊の指揮言語でも東部変異体が使用され、テレビやラジオでも多くが東部変異体で放送されたため (Matković 2003: 354)、言語面でも不満が拡大した。そしてそうした不平等に対する不満は共産主義イデオロギーを基盤としようが、もしくはユーゴスラヴィズムを基盤としようが、もはや政府がかかげた「友愛と団結」といったスローガンだけでは抑制しきれなくなっていたのである。

3. 「クロアチアの春」とマティツァ・フルヴァツカ

3 - 1. マティツァ・フルヴァツカ

マティツァ・フルヴァツカはクロアチア民族の言語、文化の保護、普及を目的とした団体である。この団体は1829年に、クロアチア語の正書法改革に貢献し、南スラブ民族の連帯、統合を訴えたガイによってその設立が計画され、1842年にドラシュコピッチによってクロアチアの古典文学の出版を目的として設立された⁴。この団体は雑誌Koloを発行しクロアチア文学の紹介を行い、またクロアチア語の辞書を出版した。しかし設立当初から、当時クロアチアを支配していたオーストリア・ハンガリー帝国政府によるドイツ化政策によって活動を制限されつづけた。ユーゴスラヴィア王国建国後も、クロアチア民族主義的性格が強いために活動を制限されつづけ、僅かに出版の分野で活動を継続させていた。しかし第二次大戦中にナチスドイツの傀儡政権として樹立されたNDH (クロアチア独立国) の時代にはクロアチアの代表的な出版社として、特に若い作家の作品を出版するなど活発に活動を展開した。ところが第二次大戦後には再びその民族主義的性格から活動を制限され、出版業界の中での優位な立場を失ったが、古典作品や学術雑誌などの発行を行って活動を継続していたのである。

3 - 2. 「クロアチアの春」とマティツァ・フルヴァツカ

先ほど述べたように、クロアチア共産主義者同盟指導部は、分権化が進行していたとはいえ、いまだ中央集権的な色彩が濃い連邦国家体制とベオグラードに集中している経済・金融システムを問題視し、さらなる分権化への道を模索し続けた。そして1970年1月に行われたクロアチア共産主義者同盟中央委員会

第10回総会において、第二次大戦前からの党員でクroatia共産主義者同盟の指導部の一人であったバカリチの指導のもと、連邦政府に対しこの中央集権的な政治・経済体制の改善を要求することを確認した。実はクroatia民族主義は、中央集権体制同様、共産主義体制としてのクroatiaにとっては脅威と捉えられていたのだが、中央集権的な政治・経済体制に比べて危険度が低いと判断され、それどころかこの時期においてはクroatia民族主義者との連携も必要と考えられたのである。民族主義者との連携まで視野に入れられた動員体制のもとで、「クroatiaの均質化」という政治的用語が好まれて使用された (Rusinow 1975: 277)。

一方マティツァ・フルヴァツカは、前述したクroatia共産主義者同盟の政府に対する改善要求以前から活発な活動を展開していた。マティツァ・フルヴァツカを中心としたクroatiaの文化諸団体は、1967年2月17日の「テレグラム (Telegram)」紙に「クroatia文章語の名称と地位に関する宣言」を掲載した (Hekman 1997: 25-29)。この宣言において、「クroatia語」にセルビア語、スロヴェニア語、マケドニア語と公共サービスにおいて同等の地位を与えるよう、憲法に記載することを要求したのである (Bratulić 1997: 10)。これはノヴィサド協定によって「セルビアクroatia語 (クroatiaセルビア語)」として統合され、「西部変異体」としてしか認められなかった「クroatia語」を、一つの言語として分離させることを目的としたものであった。

またマティツァ・フルヴァツカは1971年4月16日に週刊誌「フルヴァツキ・ティエドニク (Hrvatski Tjednik)」を創刊したが、数週間のうちにその購読者数は10万人に達し、マティツァ・フルヴァツカの会員数も1970年11月の30支部、2323人から、1971年春には55支部、41000人に増加した。ザグレブ大学においても学生組織である学生同盟の指導部に、マティツァ・フルヴァツカの影響の下で民族主義的色彩の濃い学生たちが就任し、ザグレブ大学が民族主義運動の拠点となった。

こうしたマティツァ・フルヴァツカと中心とした民族主義運動の高揚を背景に、クroatia共産主義者同盟指導部、特にトリパロとダプチェヴィチ＝クチャール、そしてピルケルは、銀行制度や外貨管理制度の改革、富裕なベオグラードの貿易会社の抑制、かつての連邦の資産および債務の再分配を含む問題など、政府に対し非妥協的な要求を繰り返した。小山によれば、当時のクroatia国民は『民族的幸福感 (national euphoria)』に酔いしれており、共産主義者同

盟幹部のうち、とりわけトリパロとダブチェヴィチ＝クチャールは 1968 年の『プラハの春』当時のドゥプチェク第一書記の人気に匹敵する大衆的人気を博していたという（小山 1996: 20）。

しかし時間が経つにつれて民族主義運動は過激さを増していった。キリル文字で書かれた看板が破壊されたり、デモの際にかつてのクロアチア国旗をかかげたり、ユーゴスラヴィアの象徴である赤星をもぎ取った軍服でデモに参加する者が現れた。また企業においてもセルビア人企業長の追放運動がひろがった。

しかしこうした過激化する運動の対処をめぐってクロアチア共産主義者同盟指導部は方針を一本化できなかった。トリパロやダブチェヴィチ＝クチャール、そしてピルケルらは、「民族主義的ゆきすぎ」は周辺的な現象に過ぎないと楽観的にとらえ、「民族的幸福感」は、クロアチア民衆の動員という点において共産主義者同盟の定めた綱領と目標に役立つと主張したのに対し、バカリチを中心とする他の指導部メンバーは民族主義運動の活発化を憂慮し、戦術の再検討を主張した。彼らが現状を憂慮したのは、クロアチア民族主義を活発化させれば、クロアチア国内のセルビア人に不安を与え、そこからセルビア民族主義という、よりおおきな脅威を挑発することになることにつながると考えたからである。こうしたなかクロアチア共産主義者同盟中央委員会第 22 回総会が 1971 年 11 月 5 日におこなわれ、ダブチェヴィチ＝クチャールは依然として楽観的な姿勢を変えないまま現状報告を行い、その報告をめぐって激論がかわされた。その後セルビア人で執行委員会書記のドラゴサーヴァッツは 11 月 15 日にチトーの下へ、事態を憂慮しているバカリチおよび指導部多数派の使者として赴き、事態打開を直接訴えた。

しかし、このときにはすでにマティツァ・フルヴァツカを中心とした民族主義運動は暴走し始めていた。マティツァ・フルヴァツカはクロアチア憲法改正案への修正案を発表し、そこで、クロアチアは「クロアチア民族の主権民族国家」でありその主権は分離権を含む民族自決権にもとづくこと、クロアチア語は唯一の公用語であること、クロアチア当局は、クロアチア領内で徴収されるすべての税収を全面的にコントロールし、共和国間協定に基づき連邦への「自発的」分担金のみ拠出すること、クロアチア独自の金融政策と発券銀行をもつこと、クロアチアで徴兵された連邦軍の兵士は通常、共和国内でのみ勤務する、そして共和国独自のクロアチア国防軍をもつことを主張したのである。

この事態に対しチトーは 12 月 1 日と 2 日にセルビア共和国ヴォイヴォディナ

自治州のカラジョルジェヴォで共産主義者同盟幹部会第 21 回会議を開き、クroatia情勢に関する議論をユーゴ全体でおこなうことを決めた。その後 71 年 12 月 12 日、13 日にクroatia共産主義者同盟第 23 回総会が開催され、クチャール、トリパロ、ピルケルは辞任を余儀なくされ、彼ら以外にも 400 人以上の共産主義者同盟員が除名された。またマティツァ・フルヴァツカも活動を出版部門のみに制限され、トゥジマンをはじめとする主要メンバーの多くが逮捕、投獄された。このように、分権化をきっかけに強まったクroatia民族主義の流れは、「クroatiaの春」によって高揚を見せたものの、連邦政府の介入によって終結させられたのである。そしてこの事件後、連邦政府による行政の再集権化が始まるのである。

4.カトリック教会の活動

4 - 1.「マリア崇敬」とクroatia民族主義

カトリック教会にとってもクroatia民族主義が高揚した 1960 年代から 70 年代初期は重要な時期であった。ユーゴスラヴィア建国当初から、カトリック教会は連邦政府から厳しい統制を受けてきたが、経済改革や分権化政策が行われていたのとほぼ同時期に、その統制が緩和されるのである。そして緩和へと変化するきっかけとなったのが、1966 年のバチカンとユーゴスラヴィアの国交回復であった。公式には 1964 年からバチカンとの交渉が始まり、1966 年に議定書を交わし、ユーゴスラヴィア国内でのカトリック教会の法的地位について合意し、これによって教会は法律の枠内での宗教活動の自由が認められた。そしてバチカンのカトリック教会へ及ぼす権限は、教会の運営や宗教的な事柄に限られた。また聖職者が、教会組織を政治的目的のために利用しないことにも合意した。これによってクroatiaのカトリック教会の活動に対する制限が緩和され、教会の建設、独自の新聞の発行、学校の設立などが認められた。また政府からのカトリック教会を含む各宗教団体への補助金交付といった支援がされるようにまでなったのである。それには宗教団体を政権側に取り込む狙いがあった。

この統制の緩和を受け、カトリック教会は活発な宗教活動を展開したが、その活動の中心にあったのが「マリア崇敬」⁵であり、そしてその「マリア崇敬」にはクroatia民族主義的な要素が色濃く含まれていた。1971 年 8 月にはマリア崇敬及びマリア論に関する国際会議がザグレブとマリヤ・ビストリツァで行

われた。特にマリヤ・ビストリツァは、クロアチアのザゴリエ地方の南東に13世紀から存在するマリア崇敬の聖地であり、毎年約80万人の信者が巡礼で訪れる。1650年にはマリア像(「黒い聖母」)がクロアチア人にオスマントルコの侵略を知らせるために移動した、といった「奇跡」が伝えられ、それ以来このマリア像は「クロアチアの女王」もしくは「最も忠実なるクロアチアの庇護者」と呼ばれ、民族主義的特徴を色濃く持つ聖地となった。そのため民族主義的観点からこの聖地とマリア崇敬はクロアチア人にとって非常に重要な位置を占めるのである。8月15日にこの会議がマリヤ・ビストリツァで行われた際には15万人以上の信者がこの聖地を巡礼で訪れた。ザグレブ大司教のクハリチは「クロアチアの苦難と処女マリア」と題する演説を行い、クロアチアのカトリック教徒を指して「小さな、抑圧された民族が最大の敬虔さでマリアを崇拝している」と讃えた(Perica 2002: 60)。ペリツァによれば、この会議が行われたのと同時期の1970年代初頭から、クロアチアのカトリック教会はポーランドのカトリック教会を見習って、「処女マリア、クロアチアの女王」の庇護の下でクロアチア人を動員する計画に着手していたという(Perica 2002: 60)。また同じく70年の8月にアドリア海沿岸の都市リエカ近郊のトルサット聖堂でも、聖母マリアを崇拝する聖母被昇天祭が執り行われ、4万人の信者が巡礼で訪れた。このようにカトリック教会は、クロアチア民族主義的色彩の濃いマリア崇敬を軸としてクロアチア各地の聖堂や聖地で活発な活動を展開した。

4 - 2.カトリック教会と「クロアチアの春」

前節でカトリック教会は、マリア崇敬を軸にして、自らの信仰や教義の範囲内で独自の民族主義を展開し活動していたが、マティツァ・フルヴァツカの活動とは一線を画し、「クロアチアの春」の際にも教会組織としてはこの運動に関与しなかった。ペリツァが1990年に行ったインタビューのなかでフランシスコ修道会の一派であるカプチン会の神学者であり、マティツァ・フルヴァツカのメンバーでもあったブニチは、ザグレブ大司教クハリチが運動の中心的メンバーであったトゥジマンと会うことを拒否したこと、何人かの司教は、マティツァ・フルヴァツカよりはむしろ当時の政権と深いつながりがあったと述べている(Perica 2002: 5)。教会内部でも、特に神学校の生徒がこの運動に積極的に関与することを望む声は強かったのであるが、教会の指導部的存在である司教団は、事態を静観する立場をとり続けたのである。この背景には、知識人、学生

達の行動に同調するより、現在の比較的自由的な宗教活動を維持した方が得策であるという判断がはたらいていたと思われる。

しかし関与しないという方針で教会内部が統一されていたわけではなく、何人かの聖職者はマティツァ・フルヴァツカの活動や「クroatiaの春」に積極的に関与した。またマティツァ・フルヴァツカの方も、当初は教会のクroatia民族主義に対する役割を評価し、「フルヴァツキ・ティエドニク」誌上で、その活動をかなり詳しく紹介している。例えば、先ほど述べたマリア崇敬とマリア論に関する国際会議にはブニチが参加したが、ブニチによるその会議の報告は「フルヴァツキ・ティエドニク」誌上で詳しく紹介されている。記事の中でブニチは8月15日の会議には10万人以上の信者がマリヤ・ピストリツァに集まったこと、この会議は宗教的、神学的な面においてのみ重要なのではなく、またこれをただの文化的な行事としてのみとらえるのは誤りであり、クroatia民族文化の遺産として重要な要素のひとつであると主張している（Bunić 1971: 12）。しかし「クroatiaの春」が終息するまで教会がこの運動にそれ以上に関与することはなかった。

ところが教会は「クroatiaの春」に組織的には関与しないという方針をとっていたにも関わらず、「クroatiaの春」以後、連邦政府から再び統制を受けるようになった。そして何人かの聖職者が逮捕、起訴された。「クroatiaの春」以降すすめられた連邦政府による再集権化により、教会が行っていた活動が問題視されたためと思われる。教会はこれに対し、政府との関係改善をはかりつつ、宗教活動を活発に展開し続けた。また移民として国外に移住したクroatia人にむけたカトリック系の組織を作って国外に居住するクroatia人から主に資金面での援助を受け、それをもとに勢力を拡大した。これによって1970年代後半にはユーゴスラヴィアでもっとも資金が豊富で堅固な組織をもつ勢力に発展するのである。

5. 結論

以上述べてきたように、クroatiaにはマティツァ・フルヴァツカが中心となっている、「クroatia語」を基盤としたクroatia民族主義と、カトリック教会によって、カトリックの教義や信仰の文脈のなかで解釈され展開されたクroatia民族主義とが存在し、両者の活動の違いが明確に現れたのが「クroatiaの春」であった。1960年代から70年代初頭にかけて、中央集権的政治体

制と、連邦政府の経済改革によって加速したセルビアへの経済・金融部門の集中、およびノヴィサド協定に基づく統一言語制定による不平等感の拡大を背景に、連邦政府に対する政治・経済・文化面での不平等是正を要求する運動がクロアチア共産主義者同盟を中心に行われた。このさいマティツァ・フルヴァツカは、クロアチア共産主義者同盟の動きに同調しつつ、この運動に積極的に関与し、「セルビアクロアチア語」を分離させて「クロアチア語」を公用語として認めるよう要求するなど「クロアチア語」の復権を中心とした民族主義運動を展開した。最終的にほぼ独立要求に近い過激な主張を展開して連邦政府による弾圧を招き、指導者は逮捕、投獄された。一方カトリック教会は少数の聖職者がこの運動に積極的に関与したものの、司教団としてはこの運動に関与することなく、マリア崇敬を軸としたクロアチア民族主義的色彩の濃い宗教活動を展開した。その典型的な活動が聖地マリヤ・ビストリツァで行われた国際会議であり、これに10万人以上の信者を動員したのである。そのため「クロアチアの春」には関与していないにもかかわらずマティツァ・フルヴァツカ同様政府による活動の制限、統制を受けたのである。

ところで「クロアチアの春」以降もマティツァ・フルヴァツカ及びカトリック教会に対する連邦政府の統制はユーゴスラヴィア崩壊まで続くが、それぞれ独自の活動を展開し続けた。そして80年代後半に、今回論じた「クロアチアの春」と類似した状況の中、つまり深刻化した経済危機の中クロアチア民族主義が再び高揚し、独立要求へと至るのであるが、そのさい双方とも活発な活動を展開して、内戦期および独立後の民族主義運動に大きな影響を及ぼすことになるのである。

注

- 1 マルクス主義「プラクシス」学派は、1960年以降、新左翼的なマルクス主義の理論を展開した哲学者及び社会学者のグループである。ザグレブ大学のペトロヴィチ、ベオグラード大学のマルコヴィチが代表的な人物で、彼らは雑誌『プラクシス』を1964年に発行し、また『プラクシス』国際版を65年に発行した。1948年のコミンフォルム追放以降、ユーゴスラヴィアでは共産主義国家としてスターリニズムに代わる、あらたな共産主義理論を構築する必要に迫られたが、このとき行われたのが、マルクス、レーニンなどの著作を再び読み直し、新たな理論を構築することであり、そしてそこから誕生したのが「プラクシス」学派であった。岩淵によれば、この学派の活動は二つの主要な段階に分けられ、1960年から64年までの第1の段階では主に一般的な哲学的諸問題、とりわけ存在論と哲学的人間学の諸問題が論じられ、1964年以降の第2段階においては社会生活や政治の諸

問題に密接に結びついている社会哲学及び政治哲学の諸問題が論じられた（岩淵 1976: 58-59）。しかし「クロアチアの春」以降、イデオロギーの統制が再び強化され、1975年にマルコヴィチらが大学を追放されて「プラクシス」の発行も停止された。なお詳細は岩淵（1976） Sher（1977）参照。

- 2 1941年4月6日にドイツがユーゴスラヴィア王国に侵攻し、王国は枢軸国側に分割占領された。その際クロアチアには同年4月10日に傀儡国家「クロアチア独立国(NDH)」の建国が宣言され、過激な民族主義を主張し、主にイタリアで活動していた民族主義団体ウスタシャの党首パヴェリッチが、国家元首に就任した。そしてNDHのもとで多数のユダヤ人、ロマが虐殺された。セルビア人もカトリック教会への改宗が強制され、抵抗すると虐殺されたり、強制収容所に連行されたりした。一方、第二次大戦終結直後に、パルチザンに投降した多数のクロアチア人やカトリックの聖職者がパルチザンによって殺害された。双方の死者数は現在においても明らかでない。
- 3 「ユーゴスラヴィズム(南スラブ思想)」は、1835年にクロアチアで起こった「イリュリア運動」が発端である、南スラブの諸民族(クロアチア人、セルビア人、スロヴェニア人)の連帯と「南スラブ民族」としての統合を目指した思想である。当初は言語(セルビア語、クロアチア語)の統一を主な目的としていたが、次第に政治的な連帯を目指すようになった。1918年にはユーゴスラヴィズムを基盤とした王国「セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国」が誕生したが、国王はセルビア人であり、また中央集権的な国家制度のため、セルビア人による他民族の統合、支配という性格が強く現れた国家であった。そのため建国当初から民族対立が頻発した。
- 4 マティツァ(MaticaもしくはMatice)というのは「女王蜂」を意味するセルビア語であり、1826年にブダペストのセルビア人によって作られた団体マティツァ・スルプスカによって初めて使用された。その後マティツァを名乗る文化団体はオーストリア＝ハンガリー帝国内の他のスラブ民族にも誕生し、民族語の振興、普及や民族文化の保護を目的とした雑誌の発行、民族語による書物の出版助成といった活動を通じて、オーストリア＝ハンガリー帝国内におけるスラブ民族再生運動の中核となった。
- 5 マリア崇敬とは、イエスの母マリアを無垢の聖母として崇敬するカトリック教会の風習であり、古代にキリスト教がローマ帝国に浸透していくにつれ、異教の女神信仰や聖者崇拜の風習が教会に導入されたことで、マリア崇拜の傾向が高まった。バルカン半島にはマリア崇敬の聖地として、他にもボスニア・ヘルツェゴヴィナのメジュゴリエがある。

参考文献

- Bratulić, Josip. 1997. Matica Hrvatska 1842-1997, Zagreb, Matica Hrvatska
- Bunić, Tomislav Šagi. 1971. “Značenje Mariološko-Marijanskih Kongresa u Zagrebu”, Hrvatski Tjednik, br.18 (20. kolovoza), pp12-13.
- Tipek, Tihomir. 2003. “The Croats and Yugoslavism”, Djokić, Dejan ed. Yugoslavism:

- History of a Failed Idea 1918-1992, Madison: The University of Wisconsin Press.
- Cuvalo, Ante.1990. The Croatian National Movement, 1966-1972, New York, Columbia University Press.
- Greenberg, Robert D. 2004. Language and Identity in the Balkans: Serbo-Croatian and its Disintegration., New York:, Oxford University Press.
- Hekman, Jelena.1997. Deklaracija o Nazivu i Položaju Hrvatskog Književnog Jezika, Zagreb, Matica Hrvatska.
- Jović, Dejan.2003. „Yugoslavism and Yugoslav Communism: From Tito to Kardelj”, Djokić,Dejan ed.Yugoslavism: History of a Failed Idea 1918-1992, Madison: The University of Wisconsin Press.
- Kardelj, Edvard.1975. The Nation and International Relations., Beograd, STP. (高屋定國、定形衛訳、1986年、『民族と国際関係の理論』、ミネルヴァ書房)
- Matković, Hrvoje.2003. Povijest Jugoslavije, Zagreb, Naklada Pavičić.
- Perica, Vjekoslav.2002. Balkan Idols: Religion and Nationalism in Yugoslav States, New York, Oxford University Press.
- Rusinow, Dennison.1977.The Yugoslav Experiment 1948-1974, London, C.Hurst&Co.
- Sher, Gerson C.1977. Praxis: Markist Criticism and Dissent in Socialist Yugoslavia, Bloomington : Indiana University Press.
- Šošić, Hrvoje. 1994.“Hrvatski Tjednik i 1971. Godina”, Kolo, br.11-12,pp1163-1190.
- 岩田昌征、2004年「自主管理社会主義期の諸民族主義」、『千葉大学経済研究』、第19巻第3号、33-64頁。
- 岩淵慶一、1976年、「プラクシスは何をめざしたか - マルクス主義哲学のユーゴスラヴィア学派について」、『現代の理論』、8月号、57-70頁。
- 加藤雅彦、1979年、『ユーゴスラヴィア：チトー以後』中央公論社。
- 小山洋司、1996年、『ユーゴ自主管理社会主義の研究 - 1974年憲法体制の動態』、多賀出版。
- 三谷恵子、1993年、「現在のクロアチア語について」、『スラヴ研究』、No.40、75-96頁。